

伊丹福音ルーテル教会 主の変容主日礼拝のしおり

2022年2月27日

前奏

招きのことば：詩編 100 編 1-5 節

【賛歌。感謝のために。】全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。
喜び祝い、主に仕え喜び歌って御前に進み出よ。知れ、主こそ神であると。
主はわたしたちを造られた。わたしたちは主のもの、その民主に養われる羊の群れ。
感謝の歌をうたって主の門に進み 賛美の歌をうたって主の庭に入れ。
感謝をささげ、御名をたたえよ。
主は恵み深く、慈しみはとこしえに主の真実は代々に及ぶ。

罪の悔い改めと赦しのことば

会衆： 私たちは生まれつき、自分中心、わがままで、心の中に本当の愛のかけらもありません。思いとことばと行いで、まことの神を軽んじて、となりびとにも愛のない、神の御前に罪人です。神様、ほんとうにごめんなさい。
私たちは祈ります。私たちを救うため あなたがお与えくださった イエス・キリストによって、どうかあわれんでください。アーメン。（短い黙祷を持ちましょう）

牧師： 何でもおできになる神様は、あなたのすべての罪を赦すために、そのひとり子、イエス・キリストを十字架の上で死に渡してくださいました。ですから神様の御言葉をとりつぐ務めに任じられた牧師として、今、あなたがたに宣言 します。父と、御子と、聖霊のお名前によって、あなたの罪は赦されました。安心して行きなさい。**アーメン。**

使徒信条

われは、天地のつくり主、父なる全能の神を信ず。

われは、そのひとり子、われらの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死して葬られ、

陰府(よみ)にくんだり、三日目によみがえり、天にのぼり、父なる全能の神の右に座したまえり。生ける人と死にたる人とを審かんがため、かしこより再びきたりたまわん。

我は聖霊を信ず、また、聖なるキリスト教会、すなわち聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、限りなきいのちを信ず。 アーメン。

祈り

愛とあわれみに満ちておられる 私たちの父なる神様、心から感謝をいたします。今朝も共に礼拝にあずかり、罪の赦しをいただき、新しいいのちをいただいて 一週間を始めます。

父なる神様、あなたは愛するひとり子のイエス様を、私たちを救うために世に送ってくださいました。イエス様は、力ある神様として人々を支配したのではなく、あなたの愛する独り子ですのに私たち人間と同じ姿で謙遜に歩まれ、私たちの罪を担ってくださいました。

私たちは日ごとの生活の中であなたが見えなくなることがあります。けれども、どうぞ聖書の御言葉によって主イエス様の御声を聴きくことで、あなたの恵みのもとを歩ませてください。

新型コロナ・ウィルスの感染拡大を防ぐために、なお緊張感を保っていかなければなりません。

その中でも 御手にゆだね確信をもって、あなたの子どもとして 安心して 生き生きと生きる日々を与えてください。

この祈りを、私たちの救い主であり 主である イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。 **アーメン**

使徒書朗読：第1コリント3章12-17節

この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです。だれかがその土台の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受けますが、燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われます。あなたがたは、自分が神の神殿であり、神の霊が自分たちの内に住んでいることを知らないのですか。神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされるでしょう。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。

福音書朗読：ルカによる福音書9章28-36節

この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。すると、「これはわたしの子、

選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。その声がしたとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

讚美歌 238 番

1 「疲れたる者よ、我にきたり、重荷をおろして とく休め」と、
招ける御声に 従いゆき、安けき憩いを うる嬉しさ。

2. 「渴きたる者よ、わが与うる いのちの清水を 来り飲め」と
招けるみ声に 従いゆき、救いのいずみを くむ嬉しさ。

3. 「暗きに住む者、我のてらす 真理の光を 仰ぎみよ」と、
招けるみ声に 従いゆき、み神のまさみち ふむ嬉しさ。

アーメン

説教：「これに聞け」

私たちの父なる神様と御子イエス・キリストから、恵みと平安が豊かにありますように祈りつつ、御言葉をとりつぎます。

今朝はルカによる福音書9章からのお話です。イエス様は今日私たちにお語り下さいます。イエス様の御声を聴くこと、イエス様が罪と死と悪魔の力の支配下から脱出させてくださること、そして、それらを信じる信仰をイエス様が与えてくださって、弱く、罪深く、恐れでいっぱいの人たちを、自分の十字架を負ってイエス様に従っていく人にしてくださることを教えてください。

イエス様はいよいよ私たちの罪を背負って十字架の道へ歩み出しました。イエス様はお弟子たちのなかから三人を選んで高い山に一緒に登って行きました。山でお祈りをしていると、旧約聖書のモーセとエリヤという人々が栄光の内にあらわれてイエス様をまんなかにしてお話をし、やがて雲があらわれてあたりを包み、そこから父なる神様の声で「これはわたしの愛する子、これに聞け」と言われました。弟子たちは祈っているときに眠たくなってうつらうつらしていたのですが、イエス様とモーセとエリヤが栄光の中でお話をしている姿を見て、ペテロが眠い中何とかイエス様に言いました。ここに天幕をみつつつくります、ひとりひとりのためです。しかし、そう言っていると雲があらわれてあたりを包んだので、彼らは恐ろしくなっていました。父なる神様の声がしたときにもう一度見てみると、モーセとエリヤはいなくなっていて、イエス様がおひとりそこにおられました。「これはわたしの愛する子、これに聞け」と神様が言われたのは、イエス様のことだったのです。

聖書には不思議な出来事が記されていますね。これはどんな意味があるのでしょうか。第一は神様がイエス様に聞きなさい、とおっしゃったことです。

私たちはいろんなことを耳にします。私たちのことを思って話をしてくれる人もいれば、その人自身の考えをもとに話をしてくれる人もいます。イスラエルの人にも伝統がありました。それまで尊敬してきたモーセとエリヤがいました。モーセは十戒と言う律法を神様からいただいて人々の間に残しました。十戒を守ることで神様の民であることを意識してきました。エリヤはイスラエルの人々が危機に陥ったとき何度も助けたヒーローです。そして、イスラエルの人々が幸せになっていくために神様がエリヤのような預言者をもう一度送ると言われていた人々の希望の星でした。今日のお話の少し前のところでイエス様がご自分のことを人々は何と言っているのか、と弟子たちにたずねたところがありますが、エリヤです、と答えた人もいたほどでした。

山の上で父なる神様が、イスラエルの民にはモーセやエリヤもいるけれども、これからはイエス様だけに聞きなさい、と言われました。イエス様は私たちに神様の御心を伝えてくださるまことの神の声なのです。

ですから、私たちも人生の大切なことについてイエス様の声を聴きましょう。人々の知恵や、長い研究の成果や、はやりの哲学やものの考え方など、いろいろのことが耳に入ってきます。こうしておかなければ後悔しますよ、努力すればうまくいきますよ、と勧めてくれます。けれども、私たちに神様のほんとうのおこころをお伝えくださる方はイエス様だけです。

今は聖書のみ言葉を通してイエス様は語られます。今は福音の説教をもってイエス様は語られます。自分の罪に悩むとき、自分を変えられなくてつらい思いをするとき、人々が思い通りに動いてくれないことで途方に暮れるとき、健康に心配が生じたとき、進路を決めれないで困っているとき、私たちは助けを求めます。人の声に耳を傾けます。でも最終的にはイエス様の言葉を聞きましょう。イエス様は救い主です。み言葉をもってあなたに語り掛けてくださいます。

さて、第二のことをがんがえましょう。イエス様は山の上でモーセとエリヤと何を話していたのでしょうか。ルカによる福音書では9章31節で、「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」とされていますね。エルサレムで遂げようとしておられる最期とは、十字架にかかって死んでくださること、そしてよみがえってくださることでした。最期と訳されていることばは、脱出とも言い換えることができます。

かつて旧約聖書で、エジプトで奴隷になっていた民を神の人モーセが導いて脱出しました。人々は自由の身になりました。以来イスラエルの人々は毎年、過ぎ越しの祭りという祭りを催してこのモーセによる脱出を祝ってきました。このような奴隷状態からの脱出について、モーセとエリヤとイエス様は話していました。

これからイエス様はエルサレムにのぼっていきます。そこで多くの苦しみを受けます。長老、祭司長、律法学者たちから排除されて十字架にかけられます。十字架の大きな苦しみを経て、三日目によみがえります。山に登られる直前にこのように弟子たちにお話しなさっていました。

みんなはイエス様にエリヤのように苦しい民を救ってほしい、と願っていました。それは強いローマの国の属国になっていたからです。エリヤのように神の人として少ない民を励まして、自由を勝ち取るようにしてほしかったのでしょう。モーセも、そしてそのエリヤも一緒に、イエス様がエルサレムで成し遂げる最期について話していました。それは私たちを支配し、奴隷のようにしている罪の力と、悪魔の力と、死の力から脱出させる働きです。栄光の勝利者として敵を打ち砕いて町に凱旋するのではなく、イエス様は、エルサレムで捕らえられ、辱められ、いたぶられ、殺されることを通して、私たちの罪の罰を代りに受けつくして下さって、私たちを罪と悪魔と死の力から自由にしてくださる救い主なのです。これからイエス様が私たちのために受けてくださった苦しみを覚える季節が始まります。イエス様はエルサレムに向かわれるとき、姿代わりの山の上で、モーセとエリヤと共に、イエス様がエルサレムで成し遂げる最期について語り合っておられました。

イエス様は単にイスラエルの民を、ローマの圧政から救い出すために来られたのではありませんでした。旧約聖書で約束され、預言されていたように、私たちすべてのために、罪の罰を身代わりにうけて下さって、罪の力、悪魔の力、死の力から私たちに自由にするために来てくださったまことの救い主です。そして、モーセもエリヤも、イエス様が来られるときのために道備えをしてきたのです。いよいよ、十字架の苦しみを前にして、イエス様と語り合っているところを弟子たちは目撃したのでした。

普通、神様にそのまま出会うと私たちは死んでしまいます。罪深い私たちがそのまま神様に出会うと、正しい裁きを受けるからです。罪が赦されている確信がないと、私たちは神様は怖くて近寄れません。触らぬ神に祟りなし、と言われるような気持ちになります。このようなおそれは、宇宙や大自然の偉大さや命の神秘に触れて自分の経験や知恵をこえた遠大な世界が存在することに畏れを感じる時にも起こってきます。大きな災害や人災、こんなことがどうしておこるのか、という歴史の大きな力にもあそばれているように思うときにはこわくなります。神様がどんな方かわからないまま、神様に近づくことは恐ろしくてできません。

ペテロは山の上にみつつの天幕をつくってそこにモーセとエリヤとイエス様が住んでくださったらいいと、考えました。いや、自分でも何を言っているのかわからないまま、そのように言いました。それは、山の上に来てくださったら、人々はいろいろなささげものをもってモーセとエリヤとイエス様に出会うためののぼってくるでしょう、という考えからです。

イエス様はそうなさいませんでした。これはわたしの愛する子、これに聞け、と父なる神様のことばを受けました。これはバプテスマのヨハネから洗礼を受けた時に、父なる神様からいただいたのと同じ言葉です。そして、イエス様は山を下りて大勢の群衆のもとに出迎えられました。神様に出会うことは恐ろしいことなのに、イエス様は人々の間に、神様の栄光を隠して、むしろ苦しむ人々と同じ苦しみを担って下さいました。モーセのような、先頭を行く指導者でもなく、エリヤのように敵を打ち負かすヒーローでもありませんでした。イエス様は罪深い

私たちのために共に苦しみを負ってください、ご自分がその償いの死を負ってください、私たちを罪と死と悪魔の力から解放してくださいました。そのイエス様をお送りくださった父なる神様は、イエス様を通してお出会いするときには恐ろしい方ではなく、父である神様です。

イエス様の御声を聴くこと、そして、イエス様は私たちが神の子としてくださることを聞きました。第三のことはイエス様が私たちを変えてくださるということです。

ペテロとヨハネとヤコブはイエス様とともに山を下り、エルサレムでの十字架の死に向かわれるイエス様とともに歩きました。しかし、山の上でも大事なときに眠ってしまっていた、弱い弟子たちは、イエス様がよいよ十字架刑のために逮捕されたとき、なんとイエス様を見捨ててあとに残して逃げ去ってしまいました。悪気はなかったのかもしれませんが、けれども恐ろしくて逃げてしまいました。また、ペテロは自分の身に危険が及ぶかもしれないと思うと、大切なイエス様と自分の関係をも否定して、わたしはあの方を知らない、と断言してしまいました。

山の上で大きな経験をして、そのあとイエス様と一緒に歩んでいても、彼らの罪深さはかわりませんでした。弱く、もろく、まことに自分を守ることしか考えていない、そのような者です。神様の御声を聴いて従うことよりも、人々の声をきいてその中から自分の気に入ることを選んで従うがしこいものです。神様を恐れているのに、自分の努力や思い入れをもって神様に気に入っていただけると考え違いをする的外れな者です。ペテロたちはどうしようもない、罪びとでしたが、その姿は私たちと同じです。

ペテロはあとで信仰の手紙を人々に宛てて書きました。その中でペテロの第二の手紙1章10節には山でイエス様の栄光の姿を目撃した、このときの経験が綴られています。ペテロは聖なる山で栄光のイエス様の姿を目撃し、父なる神様からこれはわたしの愛する子、これに聞けということばがあったことを綴っています。それで、暗いところに輝く灯としてイエス様のことばに心を止めてください、と語ります。

ペテロは変えられました。よみがられたイエス様は、都にとどまって祈っているようにと言われました。そのようにしていると彼らは約束の聖霊を受けました。ペテロは変えられました。イエス様が救い主であることを、迫害も、死をもおそれず、語りました。イエス様に従っていきました。自分を捨て、日々自分の十字架を負って、つまり、イエス様に従うことで払わなければならない犠牲をいとわないで、イエス様に従っていきました。イエス様がかわりに罪と死と悪魔の力を引き受けて死んで滅ぼしてくださいました。それでペテロはいのちを受けて、罪の支配から、死の恐怖から、悪魔の誘惑から脱出したのです。イエス様の言葉を語り、イエス様の与えてくださる救いをまっすぐに語り、生きるものに変えられました。あなたも今日、イエス様の御声を聴き、罪と死と悪魔の力から解放され、イエス様に従ってまいりましょう。

今週遣わされていくところで、与えられた働きを誠実に、人々の幸せを共に作り出していくように、心を込めて知恵を尽くして労を惜しまず、役立っていきましょう。

すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。ルカによる福音書9章35節

人知をはるかに超えた神様の平安が、あなたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってください。アーメン

讚美歌 190 番 献金 献金感謝の祈り

1. あめよりくだり 人となりし 上なき知恵を ほめたたえよ。
聖書(みふみ)のうちに かがやきいで、 われらのみちを てらしたもう。
2. この世をひろく てらせよとて たまいし聖書 とうときかな。
たぐいもあらぬ こがねのはこ、 真理(まこと)のたまは うちにみりてり。
3. 船路をきりの とざすときも、 ゆくてをしめす ともしびなり。
なみかぜすさぶ うなばらをも しるべとなりて みちびきゆく
4. うきくも晴れて やみは消えて、 したしくきみに まみゆるまで、
よろずのくにに このひかりを かかぐるつとめ なさせたまえ。 アーメン

主の祈り

天にましますわれらの父よ、願わくはみ名をあがめさせたまえ。みくにを来たらせたまえ。みこころの天になるごとく地にもならせたまえ。われらの日用の糧を今日も与えたまえ。われらに罪をおかす者をわれらが赦すごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。われらを試みにあわせず、悪より救い出したまえ。国と力と栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン。

頌栄：讚美歌 543 番

主イエスの恵みよ、父の愛よ、御霊の力よ、あぁみ栄えよ **アーメン**

祝福の言葉

仰ぎこいねがわくは、私たちの主、イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の親しきお交わりが、御前に集う一同とともに、今日も、この一週間も、いく久しくとこしえまでも、豊かにありますように。 **アーメン**

後奏